関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

Grimmelshausenの小説の手法について : die Simplicianischen Schriftenを中心に

著者	中川 清三
雑誌名	独逸文学
巻	10
ページ	17-37
発行年	1964-12-10
その他のタイトル	Uber die Manier des Romans von Grimmelshausen in Bezug auf die ?Simplicianischen Schriften"
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017653

Grimmelshausen の小説の手法について
—die Simplicianischen Schriften を中心に—

中　川　清　三

Grimmelshausen の作品全体を Fr. Gundolf は次の様に分類した。先づ第一に最も内面的で濃密な層をなすものとして，[1] Simplicissimus 5巻 (1669) [2] それにつづくもので，幾分独立的な価値あるものとして，Simplicissimus 6巻（続篇，1669)，放浪女クラーシェ (die Landstörtzerin Courasche 1670) 不思議な鳥の巣 (der wunderbarliche Vogelnest I 1672 秋，同II 1675 春)，永代暦 (der Ewigwährende Kalender 1670)，あべこべの世界 (die verkehrte Welt 1673) 冥途の評議会 (das Ratstübel Plutonis 1672)。そして最も重要性のうすいものとして，[3] 空飛ぶ月世界への旅行 (der fliegende Wandersmann nach dem Monde 1659)，お前と私の夢物語 (Traumgeschichte von Mir und Dir 1660) 黒と白，又は諷刺的巡礼 (Schwarz und Weiß oder der satyrische Pilgram 1667)ディエトヴアルトとアメリンデ (Dietwald und Amelinde 1670)，プロキシムスとリュンピーダ (der durchleuchtigsten Prinzen Proximi und seiner ohnvergleichlichen Lympidae Liebsgeschichts-Erzählung 1672)，純潔なるヨーゼフ (der keusche Joseph 1667) と，以上三重の濃淡の層を表すものとして，作品の文芸価値の点から区別した。これに対して J. H. Scholte は作品の内的相互関係から，1）教化的なもの，2）娯楽的なもの，3）全民衆的なものの三種に分類し，第一に属するものとして，≪諷刺的巡礼≫がモラリストとしての作者の立場を表明し，第二の部類として「純潔なるヨーゼフ」が Erotiker としての作者を示し，第三の部類にカレンダー製作者として半ば諷刺的，半

ば告白的に ≪Simplicissimus≫ を描いているとしている。 Scholte は ≪Simplicissimus≫ 第六巻の最後につけられた ≪Beschluß≫ (結語)を解説しながらその中に出てくる「純潔なるヨーゼフ」や「諷刺的巡礼」が「ジンプリツィシムス」よりも古く，作者がまだ小銃兵であった頃に着手され「ジンプリツィシムス」にまで発展したと言う作者自身の言葉を引合に出して， Simplicissimus の構想は若い頃から作者の胸中に何回となく描かれ，道徳的なものと娯楽的なものとの総合として内的発展をとげたものだと述べている。次に Hans Ehrenzeller は Gr. (Grimmelshausenの略,以下同じ)の作品を二つにわけて,Simplicianische Schriftenと Idealroman とに大別している。Simplicianische Schriften というのはVogelnest 第二部の序言の中で作者が彼の最も本質的な作品として，Simplicissimus 5巻，続篇が第6巻， Courasche が第7巻， Springinsfeld が第8巻，Vogelnest 第1部が9巻，第2部が第10巻。以上10巻よりなる作品として Simplicianische Schriften を数えているのである。この10巻の作品に入らないものとして， ≪Dietwald und Amelinde≫ や ≪Proximus und Lympida≫などを理想小説とよんでいる。これらは一種の歴史小説であるが，作者にとっては， 歴史としての過去は素材を理想化した höfisch な Roman であるから,これを理想小説とよび「純潔なるヨーゼフ」は Simplicianische Werke と Idealroman との中間的なものと見ている。

以上三者の見解はそれぞれ然るべき理由をもっていると思うが，筆者としては Ehrenzeller の見解に基礎をおいて更にそれを補充して，Simplicianische Werke 10巻とそれに対するものとして Idealroman の外にKalender-Geschichte を数えたい。そして本論としてはこれら三種の作品が相互にいかなる関係をもっているか，言いかえると，これら三種の作品が作者 Gr. からするといかなる親近間係をもっているか。 どの種の作品が作者にとって最も本質的であったかを検討して見たい。

彼の作品を発生的な順序に従って考えて見ると，Idealroman が大体初期の作品であり，Moscherosch のかなり強い感化をうけたり，また Zesen の Nachfolger のような立場にあって，Gr. が最初に文壇にうって出ようとした習作であり，少くとも作者独自のものが充分に表現されていないと

見られる作品である。

当時の読者層はと言えば，Simplicissimus や Springinsfeld の中で作者が随所に表現しているように，30年戦争はドイツの国土を廃土と化し，市民や農民達を完全に破産せしめたからして，当然の結果として文化の担手は宮廷と貴族のごく狭い範囲に限定され，教養ある市民が残ったとしても，Opitz や Zesen のように貴族に奉仕する人達であった。従って文化の担手が学者であるか，貴族であると言う事実が，Humanisten の文学観に影響を与えて文学と学問の間に密接な相互関係を生ぜしめた。すなわち文人は必ず学者であらねばならなかった。16世紀では学者は全部ラテン語を使用していたからして，文人もまたラテン語を使用し，ラテン・ギリシヤの古典文学の造詣が必須であった。これは丁度日本文学の根底に大きく支那文発が影響し，明治文学までは多少なりとも儒教的精神が発見されたのとよく似た現象である。

さて Barock 文学が宮廷を中心とする貴族に限定されていたとすると，その人達を対象とした文学には何等か特種な様式が要求されたであろうかと言うに，そこには確かに入室の儀式とも言うべき冗長な Präludien が本来の文章に入る前に繰返されたのである。一体17世紀の書物は文学に限らず，その本の大体の内容を副題として書きつらねたようであるが，それをもっと立入って Vorrede の問題として Ehrenzeller が取扱っているので，その所説に基づいて議論を進めて見よう。

最も重要性のうすいものとして Gundolf のあげていた Traumgeschichte や Mondreise はその後の研究により結局 Baltasar Venator の作であり，従ってGr.の処女作は1666年秋に出た≪der Satyrische Pilgram Teil Ⅰ≫であると判定され，Teil Ⅱ はその翌年1667年に出版された事になる。所でこの作品は1683/84年，1685/99，1713年に出た全集には収録されていないので入手困難であるが，原本はFreiburgのBibliothekとZürichの Zentralbibliothek に保存されている。この作品に著者は三つの Vorrede 1) Vorrede ≪momi placat!≫ 2) Vorrede ≪Gegenschrift des Autors≫ 3) Vorrede ≪An die Leser≫ をつけている。Gr. は自分の作品の影響に対してかなり鋭敏であった。それで最初の≪momi placat≫

では Urleser として一人の喧しい非難者を仕立てて，実は自分の処女作が世間からどんな悪評をうけても大丈夫なように最初から大いに貶しておくと言った方法を取っているのである。このような態度をとった理由は既述の如く文人は学者でなければならず，彼自らも古典の作品から数多く引用したり，百科辞典的知識をひけらかしているのであるが，何と言っても本式の学者ではなく，独学者であった所から一種の Lampenfieber を感じていたと思われる。所が次の ≪Gegenschrift≫ では著者は自己の Ungelehrtheitを少しも否定せず，堂々と„Daß ich nehmlich nichts studiert, sondern im Krieg ufgewachsen … dahero auch nicht genugsamb seye, Bücher zu schreiben…solches ist niemand leider als mir.“ と言っている。Momus は小説を書く動機としてRuhmeshalber と Gewinnstes halber の二つの動機しか知らないが，著者は更に第三の Motiv として，„Wer aber etwas weiß, sols seinem Nebenmenschen communiciren.“ と言っている。さらに Autor は momus に辛棘な Humor で以て威嚇して，“Mit der Drohung, er werde das Kriegshandwerk wieder ergreifen und mit Musquet und Degen den Rezensenten auf den Leib rücken.” と書いている。一体 Gr. の作品には Dramatiker によくある „polemische Eigenschaft“ がある。（例えば Trutz=Simplex である所の Courasche の如きもの）が，この ≪der Satyrische Pilgram≫ にもそれが認められ，挑戦的反骨精神が感ぜられるのである。そして最後の≪An die Leser≫ の Vorrede は，元来他の二の Vorrede よりも以前に書かれていたらしいが，そこに Gr. の文学観らしきものがうかがわれる。もとの題名 ≪Schwarz und Weiß≫ の詳細な弁護と説明を提示しているが，その方法は Satz, Gegensatz, Nachklang の三段論法の形式によつて内容を紹介したもので，それは読者のためというより著者のための説明と考えられる。以上彼の処女作と思われる ≪der Satyrische Pilgram≫の三つの Vorrede をあげたのはこの時代の小説の様式を知るためと，さらにこの作品が ≪der keusche Joseph≫と共に内面的発展を遂げて作品 ≪Simmplicissimus≫ にまで形成されたものであるから，作者の重要な側面が覗われると考えたからである。

さて不易と流行という面から作品を観察すると，Gr. の作品 Simplicianische Schriften と Idealroman, Kalendergeschichte の中で最も流行色の濃いものはと言えば，Idealromanであるだろう。何故なら Idealroman はまた歴史小説であり，歴史小説はその素材を古代に求めていて，所謂文人は学者でなければならぬという当時の Humanist 達の要請に基づくものと考えられるからであり，その読者層は Amadis Roman によって培われた貴族社会や，それを憬れる人達であったと考えられ，必ずしも民衆全般を対象とするものでなかったと考えられるのである。

Gr. は多くの Pseudonymen を使用しているのであるが，Idealroman に属する ≪Dietwald und Amelinde≫, ≪Proximus und Lympida≫, ≪Ratio Status≫ だけは本名でかかれているのは何故であろうか，それは貴族や上流社会を対象にかかれた höfische Werke では作者は自分の名を彼等に知ってもらいたい。彼等の好意を保持したいと言う気持が働いていたのではないかと考えられる。それに対して volkstümlich な作品では匿名を用いているのは，一には当時の流行もあったと思われるが，更に深く考えると作者は Anagramm に於て彼の人生観や文学観を象徴的に表現する格好の形式を発見していたと思われるふしがある。それは ≪Baldanders sein≫ の思想を最も端的に表現したものと解せられるからである。いかに名前は変ろうと，全体としての文字の数は変らない。そこに作者は Tarnkappe を楽しんでいると思われる。Der Wahn betrügt という実相を知った作者は逆に多くの偽名で以て人をあざむいているのであるが，はたして Gr. は自らを欺き通したであろうか。むしろ自らの仮面を脱いで暴露している箇所があるのである。それは ≪Simplicissimus≫ 第6巻の Beschluß（結語）である。

オランダの船長 Cornellison が世にも不思議なこととして一人の年老いたドイツ人が絶海の孤島で椰子の葉に綴った生涯の伝記であるその書物を見せる。それが ≪Simplicissimus Teutsch≫ であるが，Beschluß はそれと全然無関係に次の事を決定している。

1) Der Simplicissimus は自伝ではなくして Fiktion である。2) それは全部島で出来たものでなくて，一部は著者がまだ Musquetier の頃

にかかれた。3) この作者は虚構の Herausgeber である German Schleifheim von Sulsfort と同一人であるが，本当は Samuel Greifnson von Hirschfeld と言う名であった。そしてこの Greifnson が Simplicissimus に先立つ ≪Joseph≫ や ≪Satyrischer Pilgram≫ の著者であった。4) Heausgeber は Grimmelshausen であるが，それは Anagrammatisch におかれた地名の背後にかくされている。しかし著者はこれを Versetzung der Buchstaben によって解明する方法を暗示しているのである。例えば Cernhein や Rheinnec は Renichen (Renchen の古名) のAnagrammである事はすぐ想像がつく。P=P (rätor). Schultheiß von Renchen は彼が 1667年以来その職にあった。 1671年4月22日に Beschluß をかいたとすると，この作品の出版の翌年に書かれたわけである。H. I. C. V. G.は Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen を意味する。そしてこの28の文字を基礎として作者は多くの Anagramm を作った事は想像に難くない。

Gr. が Simplicianische Schriftenと Kalender-geschichte に属する作品には Anagramm を用い，Idealroman には本名で書いたと言う事実からでも，Idealroman は一応他の二種類の作品とは異なり，作者本来のものでなくして，時流のために書いたものと判断する事が許されるであろう。そうなると残る二つの種類が Gr. の本来的なものと解釈されるのであるが，これら二種の作品相互の関係はどうであろうか。全然異質なものか，それともどの点が相違しているのであろうか。これを解明するためには当然 Vogelnest 第二部の序文で語っている著者の言葉を引合に出さねばならない。

„Sonsten wäre dieses billig das zehente Teil oder Buch des „abenteuerlichen Simplicissimi Lebensbeschreibung“, wann nämlich die „Courasche“ vor das siebente, der „Springinsfeld“ vor das achte und das erste Part des „wunderbarlichen Vogelnests“ vor das neunte Buch genommen würde, sintemal alles von diesen Simplicianischen Schriften aneinandergehängt und weder der ganze Simplicissimus, noch eines aus den obengemeldeten letzten

Traktätlein allein ohne solche Zusammenfügung genugsam verstanden werden mag.“ この序文を見てもわかるように，作者はこの Simplicianische Schriften 全10巻を以て一つの纏った一連の作品と見なしている事がわかるのである。それならばどのようにこの10巻の作品が相互に緊密な関係を保っているか。それを究明してゆく事によって，Kalendergeschichte との関係も自然に判明するものと思はれる。まづこれら10巻の作者と作品の同一的関係を形式的に究明して見よう。その作者に就て考えて見ると，

1) Simplicissimus の本名は Melchior Sternfels von Fugshaim でその著者がSamuel Greifnson von Hirschfeld alias German Schleifheim von Sulsfort.

2) 第6巻の Beschluß にちらりとのぞかせた著者名はH. I. C. V. G. P. zu Cernheimであった。

3) ≪Courasche≫ の Schreiber としては Philarchus Grossus von Trommenheim が仕え，それがまた ≪Springinsfeld≫の Nacherzähler でもある。

4) ≪Vogelnest≫第1部の作者は Michael Regulin von Sehmsstorff

5) その第2部の作者は aceeeffghhiillmmnnoorrssstuu である。

これらの著者名はすでにのべたように28文字の Anagramm であることは想像にかたくないであろう。従って10巻は全部同一人の作である事に間違いないのである。

次にこれら 10巻の作品相互の関連性を探って見よう。Simplicissimus Teutsch 5 巻と続篇第6巻の関係はどうであろうか。Simplicissimus 第5巻の最後で生涯を通じての反省がなされ，Guevara の文を引用して „Adieu Welt“ を叫んだ後，

„Begab mich derohalben in eine andere Wildnus und fing mein Spesserter Leben wieder an; ob ich aber wie mein Vatter seel. biß an mein Ende darinn verharren werde, steht dahin.“ と書かれているが，この文章は続篇第6巻第1章の次の文と続くものと考えられる。

—; „fahe ich wiederum an, wo ichs im Ende des fünfften Buch bewenden lassen. Daselbst hat der geliebte Leser verstanden

daß ich wiederum ein Einsidler worden, auch warum solches geschehen; gebühret mir derowegen, nunmehr zu erzehlen, wie ich mich in solchem Stand verhalten.“

かくして森の隠者の生活が再び始まることによって第6巻が第5巻の続篇としての形式が整うことになる。

次に≪Courasche≫ と ≪Simplicissimus≫ との形式的関連はどうか。これは≪Courasche≫第1章の終りに明言しているように，≪Simplicissimus 5巻6章でジンプリチウスが彼女のことを，„Es befand sich im Saurbrunn eine schöne Dame, die sich vor eine Adel außgab und meines Erachtens doch mehr mobilis als nobilis war.“ と書いていることに対する腹癒せに Trutz-Simplex として口述筆記させたものであることは衆知の通りであるから問題はないと思う。

次に ≪Springinsfeld≫ と ≪Courasche≫ との続き具合はどうであろうか。≪Courasche≫ 16章で彼女がある若い貴族の見習士官がすきになり，乳母に打明けて首尾よく逢う事になるが，傍にいる Marquedenter が邪魔なので，„Spring ins Feld und fange unsern Schecken! Der Herr Fähndrich wollte ihn gern bereuten und uns denselben abhandeln und zugleich bar bezahlen.“ と命令した。そこで私の最初の命令が彼の名前となったんだと „Springinsfeld“ の名前の由来を説明して，„Und dies ist eben der Springinsfeld, den du Simplissimus in deiner Lebensbeschreibung oftmal vor einen guten Kerl rühmest. Du mußt auch wissen, daß er alle diejenige Stücklein, die er und du beides, in Westfalen und zu Philippsburg, verübet,und sonst noch vielmehr darzu von sonst niemand als von mir und meiner alten Mutter gelernet; dann als ich mich mit ihm paaret, war er einfältiger als ein Schaf und kam wieder abgefeimter von uns als ein Luchs und Kernessig sein mag.“

更に17章では，„Schaue, mein Simplice! also war ich bereits deines Kameraden Springinsfelds Matresse und Lehrmeisterin, da du vielleicht deinem Knan noch der Schwein hütet,“ と言う風に，

Simplicius を嘲笑している。 かくて Courasche と Simplex の関係が Trutz-Simplex にある事は明瞭であるが，それと同時に Courasche の Springinsfeld との関係を暴露して， Courasche を中心に Simplex と Springinsfeldとの三角関係をも明かにしている。Courasche から Springinsfeld への移りゆきを見ているうちに， その関係は単に Courasche にとどまらず， 既に作品 ≪Simplicissmus≫ の中にその伏線があった事に気がつく。それで≪Simplicissimus≫ の中に現れている Springinsfeld を探ってみよう。彼の名が始めて現われるのは，Ⅱ巻31章で，

—; ich gabs ihnen aber nicht zu, sondern befahl, sie solten ihr Gewehr in acht nehmen und allein den Spring-ins-Feld oben bey dem Kamin lassen und erwarten, ob ich ohn Lermen und Rumor davon kommen könte.…次にⅢ巻２章では，偽の Jäger をこらしめる箇所であるが，„Aber Spring-ins-Feld war damit nicht zu frieden, sondern zwang den Jäger, daß er drey Schafe (dann so viel hatten sie stehlen wollen) muste im Hintern küssen, und zerkratzte ihm noch darzu so abscheulich im Gesicht, daß er aussahe, als ob er mit den Katzen gefressen hätte, mit welcher schlechten Sache ich zu frieden war.“

またⅢ巻７章では， „Aber ich brauchte hierzu keine Teuffels-Kunst, sondern nur meinen wolabgefaimten und durchtriebenen Spring-ins-feld, dann als die Convoy, welche zimlich Trouppen hielte, recta gegen uns über vorbey passieren wolte, fieng Springinsfeld aus meinem Befelch so schröcklich an zu brüllen wie ein Ochs und zu wiehern wie ein Pferd, daß der gantze Wald einen Widerschall davon gab.“ またⅢ巻13章で Jupiter と Springinsfeld が Simplex を忠告する所では， Meinem getreusten Cameraden Springinsfeld schenkte ich zwölff Reichsthaler, der rieth mir dagegen, ich solte mein Reichtum von mir thun oder gewärtig sein, daß ich dadurch in Unglück käme, dann die Officirer sehen nicht gern, daß ein gemeiner Soldat mehr Geld hätte als sie.“ 以上の文例でもわかるように，Springinsfeld は Simplicius にとって最も信頼に値する戦友であり，

戦場では彼ほど頼りになる男はなかったと思われる。従って Simplicius と Courasche および Springinsfeld との続き具合は充分に緊密に行なわれているものと考えることが出来る。その点を次に作品 ≪Springinsfeld≫ の側から考察して見よう。

クリスマス頃の寒さ厳しい日にこの物語の話し手はある高貴な人の書記を志願したが，体よく半ターレルのお金で玄関払いをくらってふらふらと居酒屋に入って来る。そこで異様な格好の黒い上っ張りに緑の裏をつけたものを着た大男が太い巡礼の杖を横たえて，酒の中に粉薬を調合してうまそうに飲んでいた。そこへ義足の男が入って来て，酒で身体が暖まると，Geige を出していろいろな音色を奏楽した。 „Höre," sagte der im schwarzen Rock ferner, „bist du nit der Springinsfeld?"—„Vorzeiten," antwortet dieser, „war ichs, aber jetzt bin der Stelzvorshaus nach den gemeinen Sprichwort; „Junge Soldaten, alte Bettler!" „Aber wie kennst mich der Herr?"— „An deiner artlichen Musik," antwortet jener, „als welche ich bereits vor mehr als dreißig Jahren zu Soest gehöret habe. Hast du nicht damals einen Kameraden gehabt unter denen daselbest gelegenen Dragonern, der sich Simplicissimus genennet?" Da nun Springinsfeld solches bejahete, sagte der Schwarzrock. „und ebenderselbe Simplicius bin ich!" (2.Kap)

かくて二人の戦友の邂合がなされるのである。Courasche が Trutz-Simplex として Simplicissimus に対して polemisch な性格をもつとすれば，Springinsfeldは Simplicissimus に対する再会の歓びを描くと同時に，Courasche に対して逆に Springinsfeld の側からの暴露戦術による復讐が語られているのである。≪Springinsfeld≫ 第13章で Simplicius が一別以来の消息を Springinsfeld に聞き，その変った名前の由来から，Courasche との関係についてたづねると，„Das ist gewiß, mein Simplice, daß ihre damalige liebreizende Schönheit von solchen Kräften war, daß sie noch wohl andere Kerl, als ich gewesen, an sich zu ziehen vermochte; ja sie hätte auch meritiert, von den

allervornehmsten und ehrlichsten Kavaliern bedient zu werden, wann sie nicht so gottlos und verrucht gewesen wäre; aber sie war in den Begierden nach Geld so ersoffen, in allerlei Schelmstükken und Diebsgriffen, solches zu erobern, so abgeführt und fertig und in Vergnüg ihrer brünstigen Geilheit so gar insationabilis, daß ich gänzlich darvor halte, es hätte niemand keine Sünde daran getan, wann er ihr zur Ersparung Holzes einen halben Mühlstein an Hals gehängt und sie ohne Urteil und Recht in ein Wasser geworfen hätte. Diese Unholde, als sie meiner müd worden, brachte beides, durch ihre tapfere Faust, darauf sie saß, zuwegen, daß ich sie wider meines Herzen Willen quittieren mußte,…"

Courasche と Springinsfeld の喧嘩別れの話については≪Courasche≫ 21章—22章に書かれているが，そこでは Springinsfeld の方が彼女に乱暴を働いて，彼女を裸にして陣屋のかがり火の中に投げこもうと走り出したことがかかれているが，≪Springinsfeld≫ の方ではやはり彼女に対する憤懣の念があったことがわかる。かくて Simplicissimus に対して再会の喜びを表明すると共に，Courasche に対しては polemisch な性格をもっていることは見逃すべきではない。

それでは最後に ≪Springinsfeld≫ と ≪Vogelnest≫ との続き具合はどうであろうか。≪Springinsfeld≫ 22章—23章で，彼がハンガリーでトルコ戦争に参加し負傷後療養中に和議が結ばれ，以来乞食の群に投じて生活してゆくうちに，盲人の琵琶弾ひきの娘に年甲斐もなく惚れ込んで結婚する事になるが，その義理の父母をなくしてしまったある日，川辺で未来のことなどを若い妻と相談しているとき，水中にうっつた木の影に陸の上の木の股には見られない鳥の巣がうっているのを見た。

Ich sahe ihr gar eben zu und wurde gewahr, daß sie in demselben Augenblick verschwand, als sie das Ding, dessen Schatten wir im Wasser gesehen, in die Hand genommen hatte; doch sahe ich noch wohl ihre Gestalt im Wasser, wie sie nämlich den Baum wieder herunter kletterte und ein kleines Vogelnest in der Hand

hielte, das sie vom Baum heruntergenommen hatte. この鳥の巣を手にすると，琵琶をひいて金儲けをして生活する方が安全だと言う Springinsfeld に向って悪態をつき乍ら消え失せてしまう。年若い女房の行方を案じながらも再び戦場にひき出された彼は炸裂する地雷にかかって片足を失い，赤痢にかかって療養する内に和議がなり，香具師の仲間入りをしてドイツに帰り，ミュンヘンの宿屋の主人の口から，不思議な鳥の巣をもつ彼の女房の消息をきく。町の内外で散々幽霊事件として人々を悩ました揚句，男振りのよいパン職人と無理やりに結婚した彼女は，気味悪がった職人が一切を懺悔したので夜中12人の Hellebardirer の襲撃をうけ，職人は目に見えないその女の短刀で刺され，近づいたパルチザンも斬りつけられたが，逆に見当つけて斬りつけた Hellebardirer の刃にかかって遂に真二つに斬り倒される。こうして不思議な鳥の巣の為に，虚栄に走り，Courasche 型の女となって肉慾の為に自らをあやまってEhebrecher となり，Mörderin となって最後は魔女として火刑に処せられてしまう。彼女が死に際に落したハンカチを拾い上げた一人の Hellebardirer はそれ以来すっかり身体全体，消えてなくなってしまった事を宿屋の主人からきいた Springinsfdld はこれでまた新しい鳥の巣の主人が出来たわけだと思うたが黙って立去った。さてこの話をそっくりそのまま受けついで Vogelnest 第1部は次のような書き出しで始まる。

Der seltsame Springinsfeld erzählet in seiner Lebensbeschreibung, welchergestalt seine Leirerin dies Vogelnest, davon ich jetzt zu reden vorgenommmen, von einem Baum erhoben, dardurch unsichtbar worden, allerlei possierliche Händel angestellt und endlich um Leib und Loben kommen; item daß bei ihrer Aufopferung derjenig, so sich nach einem Nastüchlein gebuckt, das sie in ihrem Sterben aus der Hand fallen lassen, mit Leib und Seel, Haut und Haaren, Kleidern und allem hinwegkommen, daß seither niemand erfahren, wohin er geflogen oder gestoben sei. そしてその姿を消した男こそこの私であると名のり出ている。最初それを手にした時は英国皇帝の位と英大国全部とも交換したくないとさえ思った不思議な鳥の巣で

あったが，いろいろと不思議な体験をして，そのためにおこった不幸の数々を思うと空恐ろしくなり，遂にこの偶像からの脱出を願う気になって，思い切ってそれを胸からはづし，七百の破片に切り裂いて捨ててしまう。するとそれをせっせと忠実な蟻が集めて自分の巣に運んで行った。その時狼の群が襲うて来たので傍のぶなの木によじのぼった。上を見ると二匹の白い大蛇がいるし，下には狼が戦列をしいて襲わんとしていた。そこへ2人の男が現れ，1人はぼろをきた老人で，も1人は金持らしい男である。老人は金持に向ってお金がほしいか，それとも姿をかくす宝がほしいかとたづねると，金持は金はいらないから姿をかくす宝をくれと言った。老人は蟻の運んでいる鳥の巣を片手でとり，ぬれたハンカチで固め終ると忽ちに姿が見えなくなった。それを確かめて金持に渡し立ち去ることを命じたかくして Hellebardierer から金持の商人に鳥の巣が渡り，Vogelnest 第1部から第2部に移るわけである。

以上作品の点からSimplicianische Schriften10巻が相互に関連性をもっているかどうかを形式の上から調べて見たのであるが，一応関連性を持続する事が確認されたわけである。しかしながら今度は形式としてではなしに，その本質として果してこれらの10巻の作品が終始同程度の緊密な同一性によって結ばれているや否やを検討して見たいと思う。

まづ作者の点について言えば如何であるか。Simplicianische Schriften の Verfasser, Herausgeber, Erzähler, Schreiberなどが Beschluß の記事を見てわかるように，これら数個の名前はみな Anagramm であることは既述の通りで問題はないと思う。問題はただ作者が同一人であると言うことよりも，作品の主人公と作者の関係にあると思われるのである。何故ならば Gr. の作品はこの他にも多くあるにも拘らず，作者はこの10巻の作品をSimplicianische Schriftenとして一つのまとまりある叢書として取扱はんとするのである。その秘密を開明するためにも是非とも作者と作品の主人公の関係や全10巻を通じての内的構成を究明せねばならないであろう。その方法として筆者は作品の中に現れた ≪ich≫という表現を分析して，作品の主人公と作者の相互関係を究明する事が近道であると考える。

さて≪Simplicissimus≫ を開くと劈頭に，Es eröffnet sich zu dieser

unserer Zeit (von solcher man glaubt, daß es die letzte seie)… と言う文章があり，所謂 ≪die lezte Zeit ≫の思想が伺える。これは無意味に掲げられた言葉ではなしに Simplicianische Schriften を通じて最後の Vogelnestに到るまで赤い糸のように貫いている観念に外ならない。すなわち絶海の孤島で悪魔の誘惑のとどかない所でひたすら神に仕える隠者の目から眺められた現世の姿は，実に終局が近づいたと思われたに違いない。えんえんと業火の燃えさかる地上には頼むべきものは何一つなく，悪徳の充満せる世界であり，自己を眩惑するものであった。従ってかかる見地から天国も知らねば地獄も知らず，悪魔も病気もおのれの無知さえも知らない生活に対して，„O edels Leben! (du mogst wohl Eselsleben sagen)“ と叫ばざるを得なかった。すなわちそこに現れた ≪ich≫ は作品の主人公であると同時に，作者の立場をかねる所の Doppelgängigkeit がひそんでいるのである。その態度から Gundolf の所謂 ≪romantische Ironie≫ が生ずるのである。冒頭に掲げられた射程が Ende-Zeit にあり，V巻の終りで Guevara の Adieu Welt! の文章を引合に出して Ende-Zeit と思われる Welt からの脱出が説かれることにより，この作品は一応完結したと見るのが当然である。丁度一定の目盛りのされた容器にその内容となるべきものをその目盛りの所までみたした以上は，その作品をそれ以上続けることはただ溢れるだけである。それならば続篇第6巻の存在理由はどこにあるか。それはその内容となるべきものの続行ではなくして，逆にその内容の整理にある。作品の主人公としての ≪ich≫ の発展の跡を辿るのでなしに，作者の立場にたった ≪ich≫ が世界全体を鳥瞰して，この世界に充満する悪徳の正体を把握する点に続篇の存在価値がある。かくて Simplicissimus 個人の≪ich≫は Gr. と言う作者の≪ich≫すなわち全作品の統制者としての≪ich≫に移行している。この立場に立って現世を達観すれば，そこに悪魔の一家があり，Luzifer から Hoffart, Geitz, Zorn, Neid, Haß, Rachgier, Mißgunst, Verleumdung, Wollust, Faulheit 等の悪徳が生じ，また人生の有為転変の姿を観れば Baldanders との会話や Scheermesser（雪隠の落し紙）の話などが生ずるわけである従って第V巻までは観客の側から舞台の進展が観察されていたのに対し，

第6巻では逆に舞台裏から事件の大道具小道具を説明するという仕方をとっていると思われる。すなわち第5巻と第6巻の関係は同一線上の進展としての続行ではなくして，第5巻で一旦完結したものを非連続の連続として，鳥瞰的に円環を描いて続行しているのである。従ってかかる立場にたって観察する眼は個人の眼でなくして，世界全体を支配する全人の眼であり，そのような眼で眺められた続篇には Kalender-Schreiber としての作者の抱負が語られているのである。事実Continuatio として書かれたものは第6巻だけに止らない。今その一例をあげてみると，Andere Simplicianischen Wunder-Geschicht. Dritte Continuatio の中で，„Wolten aber meine Tadler mich etwan vor einen Ignoranten ausschreien, so solten sie nur meinen Ewigwehrenden Calender nebst vielen andern nachdencklichen Tractätlein durchzublättern sich nicht verdriessen lassen und gedencken, daß, wie offt unter einem unflätigen Mantel ein guter Philosophus stecket, also sey auch bisweilen unter einem einfältig lautenden Nahmen und von geringen Sachen den Worten nach handelndem Papier wol etwas anders verborgen, das einer und anderer nicht alsobald penetrieren könne“ とかかれている。然るに Courasche や Springinsfeld の Simplicissimus に対する関係は個人的なものであるだけに一層緊密なるものがある。ただあくまで Simplicissimus 自身を対象としていないからして，作者の代りに Schreiber や Nacherzähler が出ているのである。尤もその Schreiber Nacherzähler がまた作者の Anagramm であることは既にのべた通りである。しかし≪Courasche≫第1章で≪ich≫と名告っているものは Trutz-Simplex としての Courasche 自身であって，Schreiber ではない。この作品28章を通じて Schreiber が自らを≪ich≫と表現して現れている箇所は一つもない。徹頭徹尾 Courasche の≪ich≫であり，その意味において矛盾もなければイロニーもない。≪Simplicissimus≫5巻の5分の1にもたりない ≪Courasche≫ が退屈なほど長く感ぜられるのはそこに何等の発展もなければ転機もなく，終始現世としての Diesseitigkeit を出ていなかからである。 Erdgeist のような女 Courasche には絶望もなければ回

心 (Bekehrung) もない。あるのは若さと美貌を道具として肉慾と物慾の満足のために人々をだます事だけである。その意味において Trutz-Simplex としての Courasche は Simplex に対して≪du≫として登場し徹頭徹尾男性を誘惑するものとして描かれている。それに反して同じ俗世的であり，現実的である Springinsfeld は最後に Simplicius の忠告に従って彼の家でクリスト教徒として静かに息を引きとる男性≪er≫が描かれている。Courasche は人間の社会から追われても，決して懺悔や後悔がなく Tigeuner の女王として放浪を続けるが Springinsfeld はどうであろうか。

この作品28章のうち，最初の10章までの主な登場人物は Simplicius と Springinsfeld と書記であるが，≪ich≫として登場しているのは書記である作者は書記の立場をかりてその人生観を表現している。何故結婚しないかと言う Simplicius の質問にSpringinsfeldが女性に対する不信をのべ,彼の生い立ちの記を話す。そして主人公は書記の≪ich≫から Springinsfeld に移る。物語りはかくして始めて緊迫感を帯びてくる。主人公の人生体験の中で最も迫真にみちて描かれているのは 第16章で Nördlingen の合戦後，Springinsfeld が放浪中に,厳寒の候,狼の群に襲撃されて九死に一生を得る話と22章の Leierin との結婚である。そして最後の27章で Simplex と Springinsfeld の話を書記が nacherzählen することを依頼されるに至って，また ich の座が Springinsfeld から書記に移行する。
Simplicius と個人的な関係にある Courasche (du) と Springinsfeld (er) の物語りが終って Simplicianische Schriften は一応終りを見たと言えないこともない。何故ならば Vogelnest 第Ⅰ，第Ⅱ部と Simplicius とは何等個人的な関係はないからである。ただ不思議な鳥の巣の持主の一人が偶然，Springinsfeld の若い妻 Leierin であった事と，この不思議な鳥の巣を通じての関係が進展しているにすぎないからである。それなら鳥の巣は何を意味し，それが Simplicius とはいかなる関係をもっているであろうか。
Courasche 18章で Spiritus familiaris という Hausgeist の事が出てくる。„Einsmals brachte mir ein alter Hühnerfänger, ich wollte sagen, so ein alter Soldat, der lang vor dem böhmischen Unwesen

eine Musket getragen hatte, so etwas in einem verschlossenen Gläslein, welches nicht recht einer Spinnen und auch nicht recht einem Skorpion gleichsahe."すなわち密閉したガラス瓶にくもともさそりとも見えるものが入っている。これは何だとたづねると, Er antwortet: „Frau Courasche! es ist ein dienender Geist, welcher demjenigen Menschen, der ihn erkauft und bei sich hat, groß Glück zuwegen bringt."このHausgeist は何の象徴であろうかと言うと, この頃Courasche は金さえ儲かれば手段をとわないと言う有様であった事を考慮にいれて考えると，どうも利己心の象徴ではないかと思う。少しでもやすく買って高くこれをうりつけると言う精神の現れであると解釈されるのであるが，この Spiritus familiaris が更に高度の発展を遂げたものがこの鳥の巣ではないかと思われる。すなわち鳥の巣は突然現れたものでなしに，既にその前身として〝利己心〟として現れていると見られるのである。この Spiritus familiaris が更により高度な進展をとげたものとして鳥の巣が誕生したとすると，その鳥の巣は何を象徴するものであるか。それは恐らく人間の理性ではないかと思う。それならば人間理性の象徴とも解せられる鳥の巣が Simplicianische Schriften の最後におかれているのはいかなる理由に基くのか。

既に述べたように Simplicius 個人としての運命が一応の完結をつげた後に，続篇第6巻は非連続の連続として鳥瞰的な円環として連続する事を知ったが，今またそれと同様な事が言えると思う。Simplicissimus 5 巻に対する6巻の関係と Simplicianische Schriften 8巻に対するVogelnest Ⅰ，Ⅱの関係が類似するものをもっていると考えられるのである。そして Simplicianische Schriften 10巻を通じて共通の基盤を与えているものは die letzte Zeit (End-Zeit) であり，その末世において跳梁する悪の世界である。Vogelnest はこの悪徳の世界を浄璃瑠の鏡の如く映しだす神の遍在を悟らしめるための契機である理性の象徴に外ならない。そしてこの人間理性に執着して神の遍在を見ない者にはやがて身を滅す道具となるのである。Springinsbeld 23章で，Dies Ding ist mißlich und gefährlich, und möchte sich leicht schicken, daß sich irgends einer fände, der

mehr als andere Leute sehen könnte, durch welchen alsdann einer ertappet und endlich an seinen allerbesten Hals aufgehenket werden möchte, と言う風に，人に自分の姿が見られないと思っていると，さらにその自分の目の届かない所で自分を見ている者があることを警告しているのである。Vogelnest 第1部16章ではそれを一層明瞭に表現している。 Solches desto ehender zu fassen und zu beherztigen, machte mich damals sehr bequem, dieweil alle die Thorheiten, Fähler, Sünd und Laster, die ich, so lang ich das Vogel-Nest in Handen gehabt, von andern gesehen und gehöret, nicht vorgenommen, noch unterstanden, viel weniger vollbracht worden wären, dafern die jenige, die solche begangen, nur meine unsichtbare Gegenwart gewust hätten〔…〕かくて鳥の巣は神の遍在（Allgegenwärtigkeit）を知らしめる契機であることはもはや疑をいれないであろう。第19章ではそれをもっと積極的にのべている。 Halt inn, armer Mensch! du bist nicht allein! Der Teufel reitzet dich, er sihet dir zu und lacht, wird dich aber doch deswegen am Jüngsten Gericht anklagen. Die Engel sehen dir zu mit Betrübnüß; sie tragen Mitleiden mit dir, weil sie diese Sünd nicht entschuldigen können. Gott siehet dir zu, den du aufs höchste beleidigt und erzörnest, welcher dich auch hierum strafen wird. ≪Vogelnest≫で≪ich≫の立場に立つものは，単に作中の人物の個人的な ich でなしに，神の遍在を認識する理性的立場に立つ≪ich≫であり，それは同時に作者の ich でもあるわけで，Vogelnest I II で描かれているのはこの≪ich≫によって眺められたsie(pl.)即ち人間共の悪行である。そしてかかる≪ich≫の立場は≪Sinplicissimus Teutch≫5巻の最後の主人公の立場であり，それはまた個人的な我を離れて，volkstümlich な立場にたって，新聞や暦を制作する作者の≪ich≫であると考えて差支えないであろう。そしてかかる広い大我の境地に達するためには必ずや個我の否定が前提とならねばならない。Vogelnest I 部ではHellebardiererが堪えがたい良心の苛責に悩んだ揚句蜜蜂の襲撃をうけて苦しまぎれに，臭気紛々たる糞尿の中に身を投じて後救はれたし，第II部

では Kaufmann が彼の罪の生活を後悔して戦場で負傷し，騎馬の蹄に踏みつぶされ，その後僧によって救はれるのである。End-Zeit と思われるこの世界からの離脱は即ち新しき生への悟入を意味し，その境地に達したものはやがて広大無辺，私心なき≪ich≫の立場にたつ所の Kalenderschreiber として，「汚れた外套をきた善良な哲人」として悪徳の世界の中で同胞教化や俗世の救済に当るであろう。Simplicianische Schriften 10巻の狙いはそこにあると思われるが，その形式としても二重の環によって緊密な内的構成をもった壮大崇高なロマンであると考えられるのである。

参　考　文　献

テキスト：Grimmelshausens Werke 3Bde. (Deutsche National-Litteratur Historische kritische Ausgabe herausgegeben von Joseph Kürschner 33. 34. 35. Bd) Berlin und Stuttgart, Verlag von W. Spemann. Grimmelshausens Werke in 4 Bänden 1960 (Bibliothek Deutscher Klassiker herausgegeben von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der Klassischen Deutschen Literatur in Weimar) Volksverlag Weimar.

Friedrich Gundolf, Grimmelshausen und der Simplicissimus (Deutsche Viertel Jahrschrift Bd. 1)

F. H. Scholte, Der Simplicissimus und sein Dichter 1950 Tübingen

Emil Ermatinger, Probleme in der neueren Epik (Krisen und Probleme der neueren deutschen Dichtung 1928)

ditto, Der Weg der menschlichen Erlösung in Grimmelshausens ≪Simplicissimus, Courasche≫ und ≪Vogelnest.≫ (a.a.o)

Hans Ehrenzeller, Studien zur Romanvorrede von Grimmelshausen bis Jean Paul 1955 Francke Verlag Bern.

Melitta Gerhard, Der deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes W. Meister (Deutsche Vierteljahrschrift Bd. 9.)

Über die Manier des Romans von Grimmelshausen in Bezug auf die „Simplicianischen Schriften“

Seizo NAKAGAWA

Grimmelshausens Werke teilt der Verfasser nach den Ansichten von Fr. Gundolf, F. H. Scholte und Hans Ehrenzeller in drei Gruppen, nämlich in die ≪Simplicianischen Schriften≫, ≪Idealromane≫ und ≪Kalender-Geschichten≫. Die Idealromane sind eine Art von den geschichtlichen Romanen, in denen Grimmelshausen unter den Einflüssen von Moscherosch oder Zesen steht und seine Eigenschaften noch nicht vollkommen darstellt, und welche solche Aufforderung der oberen Klassen im 17. Jahrhundert befriedigen wollen, ein Dichter solle durch die Antike ganz ausgebildet sein. Gr. hat zwar viele Anagramme gebraucht, aber in solchen Idealromanen, nämlich in ≪Dietwald und Amelinde≫, ≪Pruximus und Lympida≫ und in der politischen Schrift ≪Ratio Status≫ unterschrieb er seinen eigenen Namen, weil er vielleicht von den oberen Klassen beliebt sein, ihre Zuneigung bewahren wollte. Aber in seinen „Simplicianischen Schriften und Kalender-Geschichten hat er immer Anagramme benutzt. Er hat in solchen Anagrammen eine symbolische Form seiner Lebensanschuung oder seiner dichterischen Ansicht gefunden. Die Simplicianischen Schriften in 10 Bänden haben nach der Konzeption des Gimmelshausen inhaltlich einen innigsten Zusam-

menhang gegen-und zueinander, indem dieser mit des Simplicissimi Fortsetzung, sowie mit dem Vogelnest sozusagen als Vogelperspektive eine Kreise ziehend, nämlich als Kontinuität von einem Unkontinierlichen dasjenige Sachverhältnis enthält, das er mit dem Simplcissimus Teutsch in 5 Bänden sowie mit den „Simplicianischen Schriften“ bis auf den 8. Band, nämlich mit der ≪Courasche≫ und dem ≪Springinsfeld≫ zum Ausdruck gebracht hat. Das Vogelnest bedeutet die menschliche Vernunft, durch welche Grimmelshausen Gottes Allgegenwärtigkeit begreifen läßt. Wer daher dieses Vogelnest besitzt, soll sich durch Gottes Gegenwärtigkeit bekehren lassen, ohne durch die Zauberkraft des Vogelnestes zur Verdammnis verurteilt zn werden. Solches wollte der Verfasser in Bezug auf die „Simplicianischen Schriften“ darstellen.